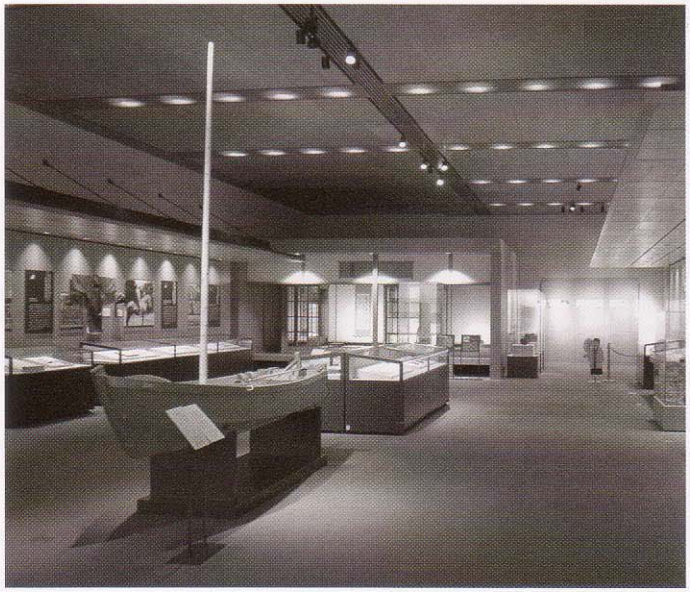
岡倉天心記念室

茨城県天心記念五浦美術館
TENSHIN MEMORIAL MUSEUM OF ART, IBARAKI
〒319-1703 茨城県北茨城市大津町椿2083 TEL.0293-46-5311
E-mail info@tenshin.museum.ibk.ed.jp
五浦美術館 検索

2009



岡倉天心（おかくらてんしん）記念室について

岡倉天心（1863〜1913）は、急激な西洋化の荒波が押し寄せた明治という時代の中で、日本の伝統美術の優れた価値を認め、美術行政家、美術運動家として近代日本美術の発展に大きな功績を残しました。その活動は、日本画の革新運動や古美術品の保存、東京美術学校の創立、日本美術院の創立、ボストン美術館中国・日本美術部長就任など、目を見張るものがありました。

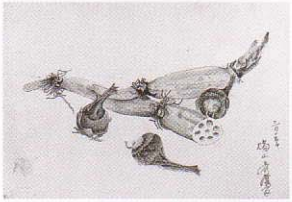
また、天心は英文著作『The Book of Tea（茶の本）』などを通して、東洋や日本の美術・文化を欧米に積極的に紹介するなど、国際的な視野に立って活動しました。さらに、天心は、晩年、茨城県北茨城市の五浦〔いづら〕の地に理想郷を見出し、日本美術院を移転、横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山を移り住まわせ、新たな発展を目指すことになります。

本記念室では、こうした天心の多方面にわたる業績を顕彰すると共に、天心と大観ら五浦の作家たちが新しい日本画の創造に邁進した五浦の地の歴史的重要性を紹介いたします。

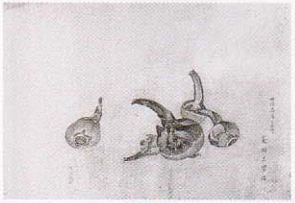
主な岡倉天心関連資料

■東京美術学校授業課題画

東京美術学校（現在の東京藝術大学）の学生が、授業で描いた課題画作品。



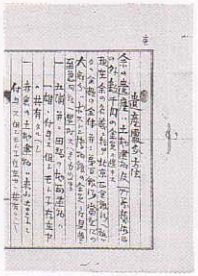
横山　大観　作



菱田　春草　作

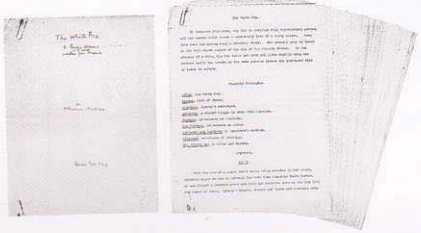
■遺言状

天心が、亡くなる一年余り前、五浦でしたためた遺言状。家族への財産分与を記したもの。



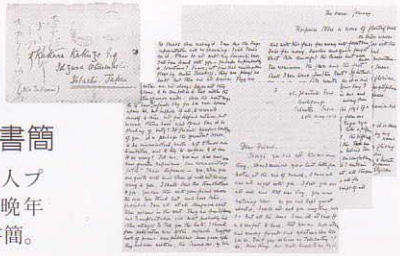
■「The White Fox」(白狐) 草稿

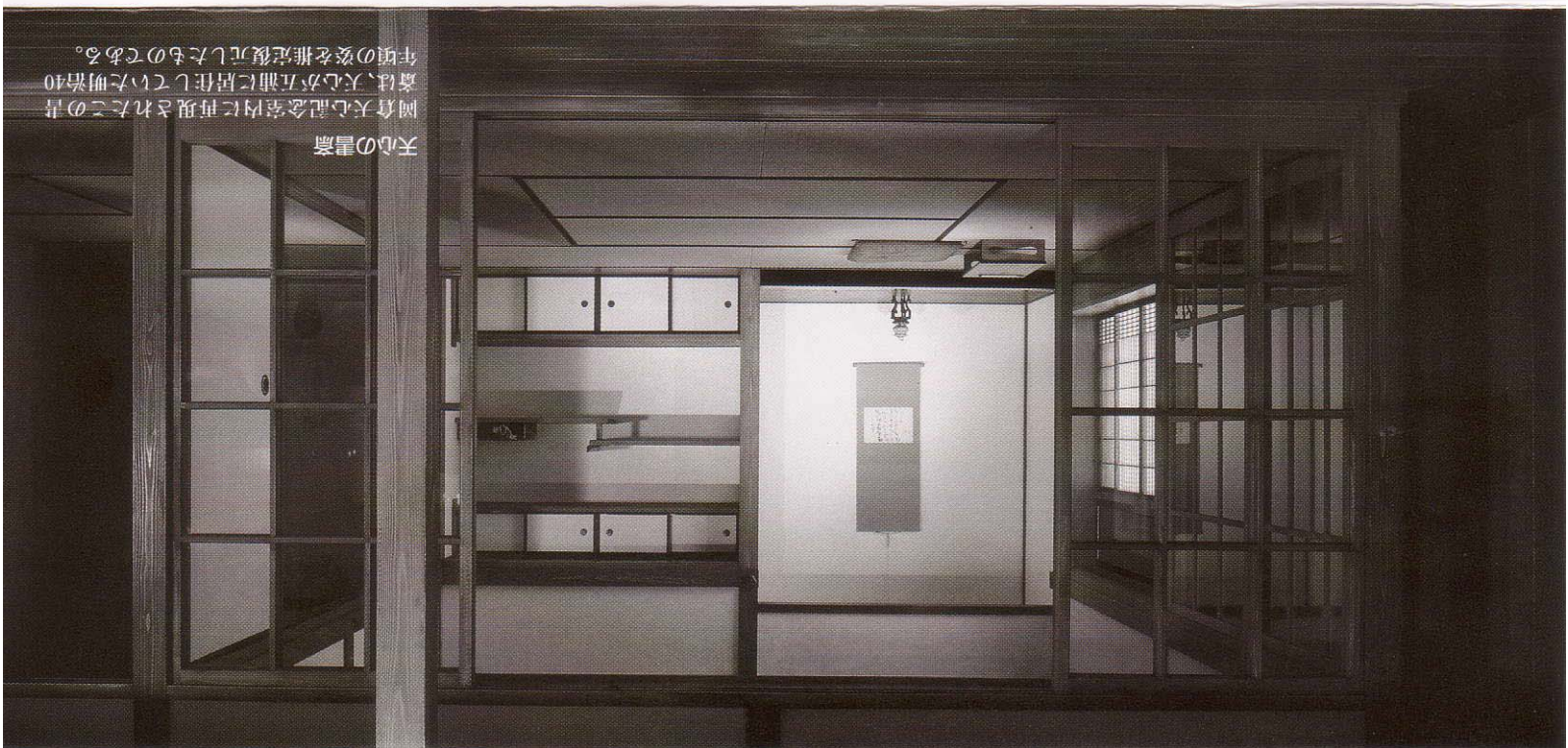
天心が書き上げた唯一のオペラ台本。危ないところを助けられた白狐が人間となり、その恩返しをするという日本古来の物語をもとに天心が脚色したもの。



■プリヤンバダ書簡

インドの女流詩人プリヤンバダから最晩年の天心に送られた書簡。





天心の書斎

岡倉天心記念室内に再現された、この書斎は、天心が五浦に居住していた明治40年頃の姿を推定復元したものである。

西暦（和暦）	満年齢	事項
1862 文久2	0歳	旧暦12月26日（太陽暦1863年2月14日）、横浜に生まれる
1869 明治2	6歳	この頃、ジェイムズ・バラーの塾で英語を学ぶ
1875 明治8	12歳	東京開成学校（のち東京大学と改称）に入学する
1879 明治12	16歳	大岡もと（のち基子と称す）と結婚する
1880 明治13	17歳	東京大学を卒業し、文部省に勤務する
1884 明治17	21歳	文部省より京阪地方古社寺調査を命じられる
1886 明治19	23歳	欧米の美術行政視察にアーネスト・フェノロサらと共に出張する
1889 明治22	26歳	東京美術学校が開校し、翌年校長となる
1893 明治26	30歳	美術調査ではじめて中国を旅行する
1898 明治31	35歳	東京美術学校校長の職を退き、日本美術院を創立する
1901 明治34	38歳	インドに渡り、翌年にかけて仏跡等を巡る
1902 明治35	39歳	インドの詩聖タゴールと交流を深める 『The Ideals of the East（東洋の理想）』を執筆し、翌年ロンドンで刊行する
1903 明治36	40歳	五浦に土地と家屋を求める
1904 明治37	41歳	アメリカのボストン美術館中国・日本美術部エキスパートになる 『The Awakening of Japan（日本の覚醒）』をニューヨークで刊行する

岡倉天心は、父岡倉勘右衛門〔かんえもん〕（元越前福井藩士）、母このの次男として横浜に生まれ、幼名は、角蔵〔かくぞう〕または覚蔵という。生家は、石川屋と号し、横浜で生糸貿易を営んでいた。

のちに東京大学文学部に在籍した天心は、政治学、理財（経済）学などを学び、ここでアーネスト・フェノロサ（お雇い外国人教師）と出会う。またこの頃から天心は名を覚三に改めている。

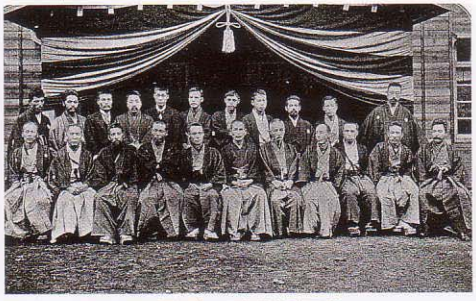
アーネスト・フェノロサ

東京美術学校の校服姿で愛馬若草号にまたがる天心

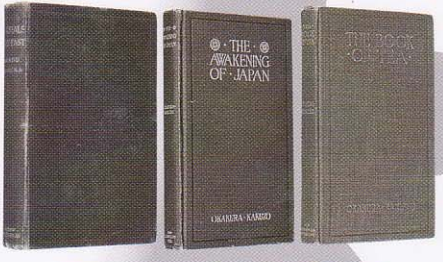
文部省入省後、フェノロサらと奈良・京都の古社寺を訪れ、法隆寺夢殿の秘仏、救世〔ぐぜ〕観音像などの古美術の調査をおこなっている。明治22年に帝国博物館理事兼美術部長、明治29年古社寺保存会委員になり、今日の文化財保護の基礎をつくった。

東京美術学校（現在の東京藝術大学）創立に奔走した天心は、明治23年に同校の校長となる。そして日本美術の伝統をふまえた新しい日本画の創造という、自己の理想を実現しようとした。卒業生の中には、横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山らが名を連ねた。

東京美術学校の大学院にあたる美術研究所の設立構想をもっていた天心は、美術学校校長を退いたことを契機に、東京谷中（東京都台東区）に日本美術院を創立した。主幹の橋本雅邦、評議員長の天心、そして大観ら26名の正員によって組織された日本美術院は、美術の研究、制作、展覧会の開催、機関誌の発行などを主な事業としていた。天心の指導を受けた大観ら青年画家たちは、ここで日本画の革新に向けて研鑽〔けんさん〕に励むことになる。



創立時の日本美術院正員
（後列右から天心、4人目春草、6人目観山、後列左端大観）



『The Ideals of the East（東洋の理想）』（左）
『The Awakening of Japan（日本の覚醒）』（中）
『The Book of Tea（茶の本）』（右）

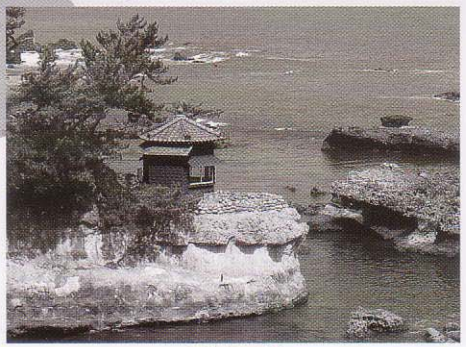
天心は明治37年ボストン美術館の東洋美術コレクションの分類整理や目録作成のため渡米する。その後、美術館のコレクション拡充のために中国・インドにも出かけている。さらに『The Awakening of Japan（日本の覚醒）』や『The Book of Tea（茶の本）』の英文著作の執筆をはじめ、講演会等を通して、東洋の文化を欧米に積極的に紹介した。

1905 明治38	42歳	五浦の別荘を新築し、六角堂を建てる ボストン美術館中国・日本美術部アドバイザーになる
1906 明治39	43歳	新潟県妙高市の赤倉に土地を求め、別荘を建てる 日本美術院第一部(絵画)の五浦移転に伴い、大観、観山、春草、武山が同地に移り住む 『The Book of Tea(茶の本)』をニューヨークで刊行する
1907 明治40	44歳	仲秋観月の園遊会を五浦で開く
1910 明治43	47歳	ボストン美術館中国・日本美術部長になる
1912 明治45・大正元年	49歳	ボストン美術館の勤務でアメリカへ渡る途中、インドに立寄り、そこで女流詩人プリヤンバダ・デーヴィ・バネルジーと出会う
1913 大正2	50歳	オペラ台本「The White Fox」(白狐)を執筆後、病気のためアメリカより帰国する 古社寺保存会に出席し、法隆寺金堂壁画の保存について建議案を作成する 療養のため新潟県の赤倉に移るが病状が悪化し、9月2日、没する
1914 大正3		日本美術院が再興される

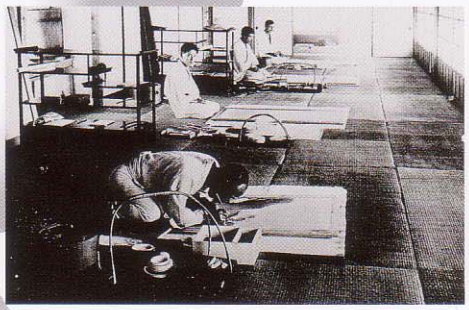
天心の美術理念を実現するために、大観らは、日本画に西洋絵画の光と空気の表現を導入する試みを行う。しかしそれは朦朧体〔もうろうたい〕と称され、世間から激しい批判を浴びた。そのため日本美術院は経営困難に陥り、活動も衰退していった。

明治39年、院の再起をはかるために、天心は、日本美術院第一部(絵画)の茨城県五浦への移転を決定する。その年に大観、観山、春草、武山の四人の作家たちは家族と共に五浦に移り住んだ。

当時の新聞で「美術院の都落ち」とまで揶揄〔やゆ〕されたが、これが日本美術院の五浦時代の幕開けであった。



現在の六角堂



五浦の日本美術院研究所での制作風景
(手前から武山、春草、大観、観山)

天心の指導のもと、切磋琢磨〔せっさたくま〕しながら制作に励んだ五浦の作家たちは、文部省主催の美術展覧会(文展)等に出品し、好評を博した。それらは、今日、日本美術史に残る名作となっている。

天心は、アメリカと日本を半年毎に往復し、国際的な活躍を見せた。

アメリカでの天心は、ボストン美術館の仕事を精力的におこない、多忙であった。一方、五浦での生活は、釣りや読書三昧という静穏な日々を送っていた。特に釣りは、自ら釣り船『竜王丸』を建造させたり、釣りの名人を同船させてその技を習得したりするほどの熱の入れようだった。

ボストン美術館(1900年代初頭)

五浦での釣り姿の天心

晩年にインドを訪れた際、天心は、女流詩人プリヤンバダ・デーヴィ・バネルジーに出会う。そしてその親交は、天心が没するまでの約一年間続いた。

天心は、唯一のオペラ台本「The White Fox」(白狐)を書き上げた後、急遽病気療養のためアメリカより帰国した。家族につきそわれて赤倉へ静養に行った天心だったが、病状が悪化し、弟由三郎、大観、観山らに看取られて世を去った。天心は、染井墓地(現染井霊園、東京都豊島区)に葬られ、遺志により茨城県五浦にも分骨された。

翌年、天心の一周忌を期して、大観、観山らによって日本美術院が再興された。